

4. 刊行物・主催会議等

気象研究所の研究成果は、気象庁の業務に活用されるほか、研究所の刊行物、研究成果発表会などを通じて社会に還元している。

また、関連する学会や学会誌などで発表することにより、科学技術の発展に貢献している。

4.1. 刊行物

気象研究所研究報告 (Papers in Meteorology and Geophysics)

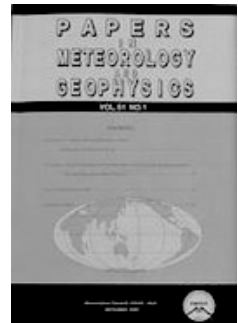
研究成果の学術的な公表を目的とした季刊の論文誌(ISSN 0031-126X)。

気象研究所職員及びその共同研究者による原著論文、短報及び総論(レビュー)を掲載している。主な配布先は、国の内外の研究機関・大学、気象官署などで、国立国会図書館でも閲覧することができる。

平成 17 年度からは 独立行政法人 科学技術振興機構が運営する科学技術情報発信・流通総合システム“J-STAGE”に登録し、オンライン発行とした。

J-STAGE URL: <http://www.jstage.jst.go.jp/browse/mripapers>

平成 20 年度は第 59 巻として計 1 冊を発刊し、次の論文を掲載した。



第 59 巻

- ・ H. Matsueda, T. Machida, Y. Sawa, Y. Nakagawa, K. Hirotsu, H. Ikeda, N. Kondo and K. Goto: Evaluation of atmospheric CO₂ measurements from new flask air sampling of JAL airliner observations
- ・ Hiromasa Yoshimura and Seiji Yukimoto: Development of a Simple Coupler (Scup) for Earth System Modeling
- ・ Hisayuki Y. Inoue, Yuusuke Fukazawa, Hiroshi Tanimoto, Hidekazu Matsueda, Yousuke Sawa and Akira Wada: Atmospheric CO₂ and O₃ observed on Rishiri Island from December 2006 to March 2007
- ・ 山本哲也, 高木朗充, 福井敬一, 大和田毅: 安達太良山の火山活動の総合的観測と推定される熱水活動
- ・ 山崎明, 青木重樹, 吉田康宏, 小林昭夫, 勝間田明男, 阿部正雄, 森脇健, 大河原斉揚, 長田芳一, 松岡秀俊, 吉田知央, 関谷博, 新納孝壽, 平松秀行: 海底地震計を用いた 2004 年紀伊半島南東沖の地震の余震観測
- ・ 高山寛美: 沖合と沿岸の津波の最大波高の統計的関係
- ・ Naoko Kitabatake: Extratropical Transition of Typhoon Tokage (0423) and Associated Heavy Rainfall on the Left Side of Its Track over Western Japan

気象研究所技術報告 (Technical Reports of the Meteorological Research Institute)

研究を行うなかで開発された実験方法や観測手法などの技術的内容や研究の結果として得られた資料などを著作物としてまとめることを目的とした刊行物(ISSN 0386-4049)。主な配布先は、国立国会図書館、国内の研究機関・大学、気象官署などで、気象研究所ホームページ (<http://www.mri-jma.go.jp/>) でも閲覧



することができる。

平成 20 年度は、第 55～58 号を発刊した。

第 55 号 「長期係留による 4 種類の流速計観測結果の比較」

(中野俊也、石崎廣、四竈信行)

第 56 号 「CMIP3 マルチモデルアンサンブル平均を利用した将来の海面水温・海氷分布の推定」

(水田亮、足立恭将、行本誠史、楠昌司)

第 57 号 「閉流路中のフローセルを用いた分光光度法自動分析装置による海水の高精度 pH_T 測定」

(斉藤秀、石井雅男、緑川貴、井上(吉川)久幸)

第 58 号 「栄養塩測定用海水組成標準の 2006 年国際共同実験報告」

(青山道夫、J. Barwell-Clarke、S. Becker、M. Blum、Braga E.S.、S. C. Coverly、E. Czobik、I. Dahllöf、M. Dai、G. O'Donnell、C. Engelke、Gwo-Ching Gong、Gi-Hoon Hong、D. J. Hydes、Ming-Ming Jin、葛西広海、R. Kerouel、清本容子、M. Knockaert、N. Kress、K. A. Kroglund、熊谷正光、S. Leterme、Yarong Li、増田真次、宮尾孝、T. Moutin、村田昌彦、永井直樹、G. Nausch、A. Nybakke、M. K. Ngircheshol、小川浩史、J. van Ooijen、太田秀和、J. Pan、C. Payne、O. Pierre-Duplessix、M. Pujo-Pay、T. Raabe、齊藤一浩、佐藤憲一郎、C. Schmidt、M. Schuett、T. M. Shammon、J. Sun、T. Tanhua、L. White、E.M.S. Woodward、P. Worsfold、P. Yeats、芳村毅、A. Youenou、Jia-Zhong Zhang)

4.2. 発表会、主催会議等

気象研究所研究成果発表会

気象研究所の研究成果を発表することにより、気象研究所の研究成果を広く一般に紹介し、社会的評価を高めることを目的とした発表会で毎年 1 回開催している。

平成 20 年度は、平成 21 年 1 月 23 日(金)に気象研究所講堂で開催し、研究報告(平成 20 年度終了課題)について計 8 題を発表した。

報告題目

- ・海洋における炭素循環の変動に関する観測的研究Ⅱ・・・・・・・・・・緑川 貴
- ・物質循環モデルの開発改良と地球環境への影響評価に関する研究・・・・・・・・柴田清孝
- ・接地境界層における乱流の構造に関する研究・・・・・・・・・・毛利英明
- ・地震・地殻変動観測データの高度利用に関する研究・・・・・・・・・・前田憲二、小林昭夫
- ・津波の予測精度向上に関する研究・・・・・・・・・・林 豊
- ・火山観測データの気象補正等による高精度化に関する研究
 - ーノイズの中から火山活動を抽出するー・・・・・・・・・・山里 平
- ・新地殻変動観測手法の研究
 - ースロースリップ検知を目指したレーザー式変位計の開発ー・・・・・・・・勝間田明男
- ・3次元数値モデルによる地震発生シミュレーションの研究
 - ー南海トラフ沿い巨大地震および東海地方の長期的スロースリップイベント再現の試みー
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・弘瀬冬樹

「渇水対策のための人工降雨・降雪に関する総合的研究」(文部科学省 科学技術振興調整費)

公開シンポジウム

平成 17 年夏に四国・九州など西日本を襲った渇水をきっかけに、平成 18 年度から 5 カ年計画で気象研究所が中心となって産学官の約 10 の研究機関が参加して科学技術振興調整費重要課題解決型研究「渇水対策のための人工降雨・降雪に関する総合的研究」を実施している。平成 20 年度は、この研究課題のアウトリーチ活動の一環として、平成 19 年 3 月東京、平成 19 年 10 月高松に次いで、平成 21 年 3 月 6 日に沖縄県那覇市「おきでんふれあいホール」に於いて 3 回目となる公開シンポジウムを開催した。(主催：気象研究所 共催：内閣府沖縄総合事務局北部ダム事務所、沖縄気象台)

このシンポジウムでは、2 名の気象研究所研究者及び内閣府沖縄総合事務局北部ダム事務所長による講演と地元マスコミ関係者を含めたパネルディスカッションを行った。

【シンポジウム講演】

- ・日本の降水の長期変動と 2008 年夏の渇水・・・・・・・・・・釜堀弘隆（気象研究所）
- ・気候変化と沖縄の水問題・・・・・・・・・・・・・・・・・・板屋英治
(内閣府沖縄総合事務局北部ダム事務所)
- ・人工降雨研究の最前線・・・・・・・・・・・・・・・・・・村上正隆（気象研究所）

【パネルディスカッション】

「沖縄の渇水と人工降雨について考える」

司会：永山玲緒奈（フリーアナウンサー）

パネリスト：花城智子（株）いとまんコミュニティエフエム放送）

釜堀弘隆、板屋英治、村上正隆

「科学と音楽の饗宴 2008」レクチャー&コンサート

「科学と音楽の饗宴 2008」を、高エネルギー加速器研究機構（KEK）、つくば市及び（財）つくば都市振興財団とともに平成 20 年 10 月 9 日に開催した。「科学と音楽の饗宴」は KEK が毎年、つくば地域での市民との交流の場として開催、特に研究機関に親近感を持ってもらおうとコンサートと科学の講演で構成される無料イベントであり、平成 20 年度は気象研究所が参加し「地球温暖化を知ろう！」と題して、地球温暖化についての講演を行うこととした。約 800 名の聴衆が集まった。

環境研究機関連絡会成果発表会

「環境研究機関連絡会」とは、つくば地域の環境研究に携わる国立及び独立行政法人の研究機関が情報を交互に交換し、環境研究の連携を緊密にするため平成 13 年に設置されたもので、現在、気象研究所を含む他 12 機関が参加している。平成 20 年 11 月 20 日に第 6 回成果発表会を開催し、気象研究所は、以下のポスター発表を行った。

- ①4 次元局所アンサンブル変換カルマンフィルタを用いたダストエアロゾルのデータ同化の研究の紹介
- ②局所アンサンブル変換カルマンフィルタを用いたオゾン全量のデータ同化の研究紹介
- ③20km 格子全球大気モデルで予測された東アジア夏季モンスーンの変化
- ④雲解像 4 次元変分法データ同化システムによる局地豪雨の予測と再現
- ⑤日本近海高解像度海洋シミュレーションと黒潮大蛇行の予測
- ⑥降灰予測に関する研究の紹介
- ⑦都市パラメータが気象に与える影響度評価・メソ気象モデル JMANHM による感度実験・

